



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生における宗教的意識について
Author(s)	加地, 徹
Citation	基督教学, 19, 28-30
Issue Date	1984-08-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46433
Type	journal article
File Information	19_28-30.pdf



高校生における宗教的意識について

加 地 徹

学究的論題の多い中に統計調査や断片的随筆的な文は場違いの感であるが生徒の非行が安易に論ぜられる現在再考の余地であると思う。さらにこの学会が教育や非行や道徳や罪と云ったものに諸兄が深く自分の身の廻りのこととして考えていただくことができれば有難いことと思うし人間は多く理論よりも情念や感覚によって生活や倫理感を左右するものだから。宮島氏の「倫理社会における集団読書についての一考察」は「哲学入門」ヤスパース著、「出家とその弟子」倉田百三著について取扱いとまとめをプリントで配布したとおり高校生としてはよくまとまったものようです。なお本日は宮島氏は急用のため出席できないので、右の資料と「集団読書を実施して」の伝言を読上げます。結局人間不信になった生徒への祖父の柔和な姿が心の平和をもたされたこと、教師も生徒も根源に宗教の支えがなければ、本当の意味で

の指導は出来ないと考えるという結びであります。生徒へのアンケートで各自の家の宗教は仏教であるがそれ以上は宗派までは理解されず個人の問題としては感じていないことが調査で判明した。旭川商業高校での悩みの調査でも授業が楽しくないなど、目標のない学校生活や自己逃避型、自己の身辺にとらわれる生徒の増加がみられた。ここで突飛なようですが、あいわ出版の「一六歳の母」という本をみなさんに紹介したいと思います。雅子の妊娠であり学校の対応はどうなるでしょう。父親は怒り母親は嘆き学校は自主退学をすすめるでしょう。真一は生れる子供や若い妻のために六千万円の生命保険に加入し通信教育の勉強と、世の大人より確実に人間の生命を大切に慎重に愛と生活を支えようとしているのに公教育では非行として片付けてしまうのです。非行は学校で云う言葉で、そこには生命を守るとか告白といった考えや行動がないのです。罪は教会や内面的なものの面で、犯罪は法律的概念としてとらえられ区分され、又は混同されている。罪や非行にあたるものが (Verbrechen) であり (sin) が宗教上の罪であるなら、モラルは信仰の力をかりないで達する徳と、モラルマンは異性との関係の正しい (ヨセフは正しい人であった) ことであり (crime)

が人が外界に対して行う構成要件に該当する態度であるとするなら、当然すべての不法行為が犯罪であるわけではなく、crimeを犯罪として重いものと考え、criminal operationが墮胎として訳されて当然であろう。「十六歳の母」にもどりますが、この本は性を避けてとおる学校教育現場で本音と建て前を實行した女教師とそれを支えた夫である教師の宗教を一言も云わず、その処置や考え方が道徳家や宗教家や術学的な人でもとれない態度を明らかに素直に明言しているところに私は感心させられました。著者は進歩的と思われる「愛と性の十字路」さえも将来の幸福な結婚のために禁欲することがと述べているがそれも禁欲的であると批判する。さらにマスターベーションの無害論は大人の子供の管理上つくり出された神話であり、精神的にも肉体的にも正常でない、それは自己相姦であるからと主張する。たしかに学校の規則を守り、校具を破壊せず静かな生徒は一般に非行少年と呼ばれないかも知れぬが、自分の心や体を弱くしていくのかも知れない。学校の非行に処罰があるが告白がない。女性が結婚するので退職しますといえば理由となり、男性が結婚するので退職しますといえば不自然に聞えることが不自然なのかも知れない。「十六歳の母」をあえて持参し

た次第です。さて学校の校務分掌で相談室というところにて感じることを述べさせてもらいます。停学になった生徒の家庭訪問をして先づ感ずるのは家に入って仏壇のないこと、当然朝夕のお参り、祖父母、本家分家の概念がないこと。ある家庭の女子生徒に仏壇はときくと隣りの部屋にあるらしい。誰を祭つてるときくと父さんといつ亡くなった、一年位前との答がかえってくる。死者に対する父に対する遺訓を守るなどは程遠いものを感じずる。早速今日から仏壇を掃除して花を飾り手を合せなさいと約束して帰り数日後に確認と以前より明るくなった態度をみて少しは安心するのであるが、キリスト教学にもとづく倫理教育は公教育において皆無である。管理者は校内紛争の解決について教員組合との協力はなく、教育委員会による道徳教育の実態調査について対立をし労組は無気力であり、私が紹介し主張していることには当然批判的である。憲法の宗教教育はしてはならないとの想定が、無反動的に非行化というより道徳の欠如の教育そして教師も又宗教的配慮を持たないのが現代的と自覚している傾向をつくる。校内紛争の解決した学校は立派な組合員である教師と権力やマスコミを恐れぬ管理者との協力によって打開している。教員組合の中で本当に

青年の愛と性を一緒に考えてくれる教師が理論と行動で現場で働く姿こそ現在欠如していると反省させられる。私立学校の管理者にこそやる気充分な気持とそれだけの余地があるといえよう。一人だけやる気で歌を歌っても、校舎や庭の維持だけで全校の協力と理解によらなければそのあとの生き方が全然得られないわけである。登校拒否の家庭を訪ねて先ず父や母が体面や高校ぐらいはといった子供の心から遠いところで話をする。私も孫や子供で苦勞し療養すると苦勞話をするとか次回に父母の態度がすこし平和に見えることがある。キリスト教はもとと祈るものであつてそれを學問として位置づけることはこの会の本質や出発点にもどることにならうし、私もドイツの聖書學者の書物をペダンテイクに紹介しようとも考えたが、心の平和を考え學究的な發表の連続のなかに單純なことから人間が自分と他人との關係において心の安らぎがあれば、そして訥弁が皆さんの心に不快の念でなく互いに平和と一致をのこせばと思つています。